

+

2022 年

8 月第 3・4 週の主日礼拝説教要約

・ 8 月 21 日：ルカ福音書 8：40-48.

「無休の神」

・ 8 月 28 日：マルコ福音書 7：31-37.

「開け」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

ガリラヤ湖と湖の北南のヨルダン川を含む一帯は、西岸と東岸では文化や民族の分布が大きく異なる地域が少なくなく、ナザレのイエスに対する熱狂的群衆の殆どは、ユダヤ人、他民族を問わず、西岸に居住していました。時々、混乱を避けるために、対岸(東岸)へと退いたイエスは、そこでは逆に抵抗を受け、しばしば拒絶されることさえありました。

ある時、対岸で悪霊と対峙し、祓魔を終えたイエスが帰還し、西岸のカファルナウムに舟が接岸すると、再び彼を待ち望んだ群衆が岸に殺到します。今度の相手は悪霊ではなく病氣(病魔?)のようです。

群衆の先頭にいたのは、ヤイロという男で、彼はユダヤの会堂(シナゴグ)の長でした。会堂で交読される詩篇には「主を待ち望め」と詠われています。彼の脳裏に聖句がよぎったか否かはともかく、ヤイロが待ち望んだ主イエスの舟が着岸しています。下船したイエスの足元にひれふしたヤイロが言うには、12歳の娘が現在「心肺停止」の状態にあるのだと。

休む間もなくイエスは彼の家へと足を向けます。けれども群衆が押し寄せて来て揉み苦茶になっていると、今度は一人の女性が群衆の中から進み出て、後からそっとイエスの衣の裾に触れました。彼女はその瞬間腹部の不快感から解放され、病が癒されたことを自覚します。その時が12年間も患っていた長血が止まった瞬間だったのです。

衣に触れられたイエスが、御自身から「力が流出した」ことを周囲にもらすと、後部にいて驚いた女は、今、自分の体内で起きたことをその場で証言したのです。すると、イエスは間髪を容れずに言い渡しました。「あなたの信仰があなたを救ったのだ。安心して行きなさい」。

さて、イエスが再び先を急いでヤイロの家に向かおうとすると、今度は娘の蘇生が不可能だと判断した身内の者が、もう手遅れであることを父親に告げにやって来ました。しかしイエスは、たった今、癒されたばかりの女性の身の上で起きたこと、彼女が救われた「信仰」の力が、次はヤイロの娘の身体にも働くことを告げます、「ただ、信ぜよ」と。

さて、少女の死を悼んで涙を流す人々が集う家の只中に、イエスは到着します。そして、彼らに告げます、「泣かなくてもよい、死んだのではなく、眠っているだけだ」。しかし、傍らでは冷笑する者もいます。「信じる」ことが念頭に無い者たちです。

子供の命が最優先です。イエスはまだ温かい少女の手をとり声をかけます、「子よ、起きなさい」。すると、霊が戻って来て、娘は起き上がったのです。

驚愕しているヤイロと妻(娘の母親)にイエスは命じました。「娘に、何か食物を与えてやりなさい」。その日に出会った、病んだ二人の人間の、一人は癒され、また一人は甦らされました。どちらの治癒も、信じることから始まっていたのです。

説教《開け》

2000年前のローマ帝国の庶民の寿命を考慮すると、当時30歳を超えていたイエスは、同年代の誕生者の中の20%前後の生存者の一人だったと考えられます。倍の60歳を超える人がいたなら、その人は同年代の3%程度の生存者となりますから、21世紀の現在ならおそらく百歳を超えているのと同じです。ペトロやパウロが他界(殉教?)した時は両者ともに60歳を超えていた可能性があります。

30歳を前にして約80%の人々が他界する中で、生れつき何らかの障害がある人はどういう扱いをうけたのでしょうか。いや、むしろ特別な扱いを受けることなく生きられるに越したことはありません。もちろん当時も医療(治療)の対象ではありませんでした。

けれどもイエス・キリストにとっては、そうではありません。イエスは尊い命を甦らせ、多くの病を癒し、多くの罪を赦すのと同様に、機能の不健全な体を健常なる身体に代えて、いずれも社会の一員に復帰させるにふさわしい存在へと変えられたのです。

さて、そこには生れつき耳の聞こえない人がいます。このエピソードはなぜかマルコ福音書にのみ記されています。記述からすると、障害は「悪霊の仕業」ではなさそうです。手や足の障害ならば、イエスが「癒されよ」とか「歩け」とか言えば、そのとおりになります。けれどもこの人は、人の声を聞きとることができません。

マルコを原本とする他の福音書の記者らは、なぜかこのエピソードを書き写すことには慎重でした。もし原因が「悪霊の仕業」なら「その人から出て行け」と「悪霊」を一喝すれば解決しますが、生来の聾者には如何なる音声も聞きとれません。勢い史実を曲げて「悪霊の仕業」とす

るわけにもいきません。聞こえないというハンディキャップは、本人はもとより、この障害に立ち向かう「治療者」にも課せられるハンディキャップでした。

マルコだけが、この困難に立ち向かうイエスの姿を躊躇なく書き記したのです。イエスはその人が生れつき聾者で言葉も満足に話せないことは承知していますから、言葉で何かを命じることとはしません。そのかわりにイエスは彼を群衆から引き離し、一対一となり、両耳に指をさしこみ、次に唾をして、舌に触りました。そして、その後になって初めて彼に語りかけます、「エファタ(開け)」。

この手順は、言うまでもなく「受肉した神」のみがなせる業です。マルコは、この事実(=史実)を独り、憚ることなく受け入れます。マルコ福音書のリアリズムはこうして達成されるのです。

旧約聖書の神は「イスラエルよ、開け(=シェーマー)」と叫ぶ神でした。けれども、その神が受肉をすると、今度は「開け」ばかりか、聴こえない耳をもその手で開く神として世に現われます。こうして、神が人と供にあるという現実は、ますます確かなものとして描写されたのです。